

# 天賦の同志

西澤直子

福澤諭吉は、天保五年二月二日、西曆一八三五年一月一〇日に生まれ、明治三四（一九〇一）年二月三日に歿した。六六年間と少しの生涯は、奇しくも明治改元の年、一八六八年でちょうど半分に分かれる。一方、まだ名前がなかった彼の塾に、慶応三（一八六七）年二月に入學した早矢仕有的は、福澤に遅れること二年八か月、天保八年八月に生まれ、福澤と同年同月に亡くなった。福澤の訃報を聞いて「この次はおれか」ともらしたといわれ、その言葉通りわずか一五日後のことであった。<sup>①</sup> 彼らは、徳川政権下の近世と明治という近代を、ほぼ半々ずつ生きたことになる。

近世から近代への大きな転換は、洋学を志した福澤といえども、簡単に受容できるものではなかった。福澤は版籍奉還を迎える頃まで、新しい政治体制に懐疑的であった。慶応二年一月七日に福澤英之助に宛てた書簡の中では「大君之モラルキ」、すなわち封建体制のもとでなくては文明開化は進まないと述べ、大政奉還後になっても「薩土之議論」は公平のようにみえて「私意」に始まったものであるから、成功はしないであろうと述べている。<sup>②</sup> しかし新政権が固まりゆくと、彼は時代に対峙し、新しい社会構想を組み立てていった。彼

が最も重要であると考えたのは「一身」の独立であり、個人の独立と自由の保障であった。個人が主体となり、「一身」から始まり「一家」「一国」へと展開する体制こそが、近代日本の理想の姿であった。<sup>③</sup>

福澤は模索の時期に、早矢仕と出会った。そして新たな社会構想を抱いたとき、早矢仕は最強の協力者のひとりとなった。福澤は近代日本について思考するだけでなく、構想実現のための方策を練った。すでに文久二（一八六二）年、訪れたロンドンから中津藩の重臣に宛てた書簡の中で、日本の急務は「富国強兵」であり、「富国強兵」の本は人物の養成であると説いていたが、「一身」の独立には学問をすること、特に解釈論が中心の儒学ではなく、科学的な思考を育てる洋学を学ぶことが必要であった。<sup>④</sup> そして、そのための場を確立することが、緊要な課題であった。福澤は、慶応四年自らの塾を慶應義塾と名付け、その由来と目的を示す「慶應義塾之記」を記し、体制を整えていった。<sup>⑤</sup>

早矢仕は福澤と親しい立場で、しかしまた別の方法で、新しい社会実現のために奮闘を始めた。福澤は三田藩知藩事九鬼隆義に宛てた明治三年一月二三日付の書簡のなかで、「同

社中早矢仕有的と申者、当時横浜在住、兼て同志廉潔之人物  
「二有之」と紹介し、三田藩の学校の実験道具や天体望遠鏡な  
どの備品調達を早矢仕に依頼することを告げている。早矢仕  
ならば、「ロンドン」「ニウヨルク」からも品を集めることが  
できる。早矢仕は福澤の要求に応え、二日後の一月二四日に  
以下のような書簡を送っている。

御沙汰之通り諸品、可相成丈廉価ニ買集、買ふ人の喜び  
を願ひ、通用のあぶなき金札にて利益を得るよりハ、無  
形ノ利益ヲ得度と、店の人々と相談仕居候事ニ御坐候。

実ニ此度之義ハ、日本に学校書類並機械の備ワル端とも  
なり、追々注文を招ク為のよき引札と、難有事ニ奉存候。<sup>(6)</sup>

早矢仕の書簡からは、医者や洋学者でありながら、商人で  
もある彼の顔が伺える。なるべく安く仕入れて買う人に喜ん  
でほしいと願ひ、そうした信頼関係を築くことが、相場を見  
て大きな利益を狙うよりは「無形の利益」になる。またこれ  
を機に、日本でも図書や実験器具、天体望遠鏡などの機械類  
といった学校の備品について考えられるようになれば、今後  
の注文につながるよい宣伝になる。目先の利益を追うより、  
日本の学校が体裁を整えるための社会貢献といった視点を持  
つことが、結局公私に利益を生むと考えている。

明治二年から三年にかけての福澤の書簡や原稿を読むと、  
三田藩の学校は、福澤の近代社会構想実現に向けての指標と

なるものであった。学校という場で教育的効果を上げるため  
には、理念や教師の充実だけではなく、学ぶ場の環境の整備  
は必須であった。早矢仕はそれを可能にできる人物であり、  
この無二の同志を得られたことが、福澤の構想実現の推進力  
となったといえる。

二人の生涯を思うとき、三〇年の間封建社会のなかで培っ  
てきた自らの価値観を壊し、近代社会の形成を目指して行な  
った新たな挑戦に、敬意を抱かざるを得ない。それは福澤は  
早矢仕、早矢仕は福澤というよき同志を得てこそその挑戦であ  
った。

① 『丸善百年史』上巻（丸善株式会社、一九八〇年）、三〇七頁

② 「大君之モラルキ」は『福澤論吉書簡集』（全九巻、岩波書店、  
二〇〇一―三年、以下『書簡集』第一巻、六五頁、「薩土之議論」  
は慶応三年二月一日付、同前八二頁

③ たとえば「中津留別之書」「福澤論吉著作集」（全一二巻、慶應  
義塾大学出版会、二〇〇二―三年）、第一〇巻、二頁

④ 『書簡集』第一巻、一二―一四頁

⑤ 『慶應義塾二五〇年史資料集』第二巻（慶應義塾、二〇一六年）、  
九―三三頁

⑥ 同右、一六三頁